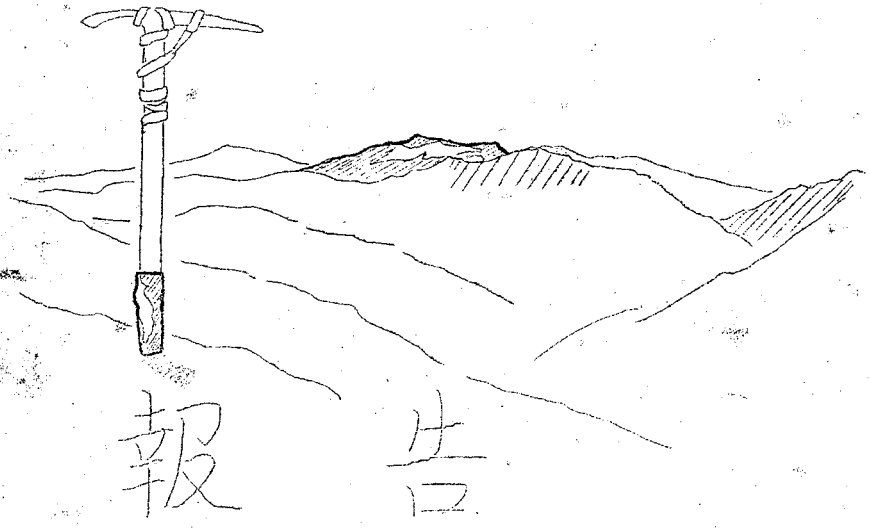
信州大学上田山岳部

1964年

S39

信大山岳会

山岳ゼミナール



報告

伊那・松本山岳部

上田山岳部

長野山岳部

目　次

1. 参加者 ―――――――― 2頁
2. 実施概要 ―――――――― 2
3. 乗鞍岳登山行動記録 ―――― 4
4. 討論会の内容 ―――――― 5
5. 会計報告 ―――――――― 13
6. 感想 ―――――――――― 14
7. その後（第二回ゼミの計画） ―― 17

空は今日もまた素晴らしく澄み渡って岳は美しく、輝いている。快い微風が頬をかすめ、暖かい春の一日である。一週間の山旅への不吉な悔恨は今は和んで、楽しい追憶のみがよみがえっていた。あの白く輝く岳の奥から鄙びた不可思議な旋律が風に乗って伝ってくる。それが無性に私を引きつける。これを見、あれを聞く時、山へ行くのが苦しいから山へ行くのでなく、また楽しいから行くのでもない。純粋に「一つのものを作り上げること」のみを目指して山へ入れるような、氷のような山男となることのいかに困難であるかをしみじみと感ずるのだ。

「風雪のビバーク」松濤明

参加者　計36名（○印は班長2名づつ）

	伊那松本山岳部	上田山岳部	長野山岳部
Ⅰ班 12名	出島　五郎　○ 真野　孝一 小川　勝 中邨　康文 井上　紀樹	小宮　良雄　○ 岡村　紀雄	忠地　二文昭 岡村　知彦 川本　美知代 有賀　久雄 西山　春代
Ⅱ班 12名	池田　直弥 松尾　武久 新谷　剛 福原　正昭 牧　晃一	森田　稲吉郎　○ 木村　修二	野村　昌男　○ 駒井　浩 小川原　五郎 荒井　多美子 藤本　正二
Ⅲ班 12名	川崎　誠 板谷　真人 田中　正治 宮崎　敏孝　○ 早都宮　昭義 向後　利彦	吉川　守	秋元　一浩　○ 井原　松美 玉井　雅子 堀内　芳次 八木　国久
	16名	5名	15名

実施概要

11月21日　晴後曇

1時 松本駅を松本の残留部員に見送られて出発。

1時40分 島々発。2時半から5時半まで道路壊損のため、バスの中で待たされる。早速クリ菓子が配られて、好評。寒い中でブルトーザーの働きを見ている者、バスの中で話に花を咲かせる者。予定は狂ったが楽しかった。

6時30分 暗くなってから雪も降り出し、その中を思ったより立派な（失礼）ヒュッテに導れる。中は暖かった。

8時頃 一班の人達が当番となった夕食も出来上り、2階に集まり、自己紹介の後、夕食を頂く。

10時に 消燈。外は新雪が積もり、夜遅くまで強い風の音が聞こえていた。

(11月22日) 晴、

7時 朝食。外は意外にも好天気。乗鞍岳も見える。あたり一面の銀世界に、飯も喉を通らない(態度がオーバーだぞ)。

7時45分 出発。

3時45分から 4時50分の間にスキーで下った松尾、板谷両氏を除き、全員帰着。昨日おられなかった管理人の岡崎さんと遅れて入った福原氏が待っていた。

6時前に夕食となる。流石に(200円のエッセン費)内容が豊富だ。食後、迎えに行こうと準備している時、真暗な中をスキーを担いで帰って来た。

6時40分から 11時 討論会。雑談も交えて、各パーティーは夫々、独自の雰囲気と姿勢で問題を提起、追究した。茶菓もとても美味かった。

11時過ぎから、スライドをする。合計 千数百枚との事で、美しく、感嘆の声、しきり。

1時に終って 就寝。

(11月23日) 晴後雪、下界では雨

ゆっくり起きて朝食を摂った後、10時から、討論会の発表をする。

11時、ヒュッテの前で記念撮影。

慌ただしく、昼食をかき込んで1時半と3時の2台に分れ、松本へ。 松本着 5時30分。

兼鞍岳登山行動記録

A、森田(L)、宮崎、本村、牧、藤本、向後　計6名

(出発)7:45—《3ピッチ》—9:45(ワカン着用)10:00—10:50(冷泉小屋)11:30—12:30(位ヶ原小屋 アイゼン着用)1:10—2:15(富士見嶺中腹)2:30—2:55(位ヶ原 アイゼン外ずす)3:05—《2ピッチ》—4:25(ヒュッテ着)

B、出島(L)、岡村(長)、有賀、井上、堀内、八木、　計6名、

(出発)7:45—《3ピッチ》—10:35(位ヶ原小屋)11:15—《2ピッチ》—12:40(肩の小屋)—1:35(頂上道下)1:40—2:10(肩の小屋)2:30—3:00(位ヶ原小屋)3:10—《2ピッチ》—4:50(ヒュッテ着)

C、野村(L)、池田、井原、川本、荒井、五井、西山、　計7名、

(出発)7:45—《3ピッチ》—10:20(冷泉小屋)10:30—11:15(位ヶ原小屋、アイゼン、ワッパ着脱練習)12:15—《1ピッチ登る》—12:45(位ヶ原小屋ワッパ訓練)1:30—3:45(ヒュッテ着)

D、秋元(L)、板谷、新谷、宇都宮、岡村(上)、駒井、忠地、松尾、　計8名、

(出発)7:45—《3ピッチ》—10:25(位ヶ原小屋、ワッパはず)11:10—12:15(アイゼン着用)12:30—12:55(肩の小屋)—1:35(頂上)1:40—2:20(肩の小屋)—2:55(位ヶ原小屋)3:05—《2ピッチ》—4:25(ヒュッテ着)

E、小川(L)、川崎、真野、田中、中邨、吉川、小川原、小宮、

(出発)7:45—《3ピッチ》—10:25(位ヶ原)11:00—《2ピッチ》—1:00(肩の小屋)—1:35(頂上)1:40—2:20(肩の小屋)—3:00(位ヶ原)3:10—《2ピッチ》—4:30(ヒュッテ着)

討論会の内容

I 班の記録より

1. 遭難対策について

○現状では、遭難の場合、要請があれば、救助に出ることになっているが、これでは強制することはできないし、時間的にも無駄があるから、条文化する必要がある。

・しかし、この問題は、S.A.C.の組織にも関係してくることであるから、条文だけが先ばしることはさけ、統合する方向にもっていけば条文も平行して出てくるのでそれを待つ。

・これに対し、条文を先に作っておいた方がよいとの意見も出た。

・こういう会合をもつことにより、部員同志がよく知り合えば、遭難の時にもすぐ行かずにはおれないような気持になるが、それでもやはり条文はあった方が良い。

○遭難対策と同時に予防の方をもっと大切に考えなくてはいけない。

・自分達の実力を上げることが予防の一つである。

・講師を招いて、講習会を受けるのも一つの方法だ。

○遭難や小さなアクシデントに対し、部員がもっと前向きな姿で向っていくことが必要だ。

・どんな小さなアクシデントでも、もっと克明に記録し、反省し、そのデーターの中からある程度の線は出すことができる。

・遭難はその人のレベル以上のところを行ったためだから、研究、トレーニングやO.B.の助言で自分のレベルを知る必要がある。

・技術的以外の遭難が多いから、もっとO.B.から精神的なものを学んでいく。

○基金は必要である。余裕がないから少しづつ貯えてゆくのはどうか。

1. 大学山岳部について

・集中的なものをするよりも、広く山を知ってから、行きたい山が決まってくればいいのだから、現状のやり方がいい。

・大きな合宿でなく裏山を研究し、知ることが必要だ。
・人員が常に入れかわる点から見て、特定の山を登るまでには到らない。

☆O.B.との関係、
・現状では、O.B.とはお金の面でつながっている。
・O.B.は社会的制約があり、実際の行動はできないから、直接部員の行動にアドバイスすることはできないかと知れないが、人間的な面で我々の知らない所は多いのだから、この点でいろいろ指摘してもらいたい。
・卒業すると殆ど山に行けない現状だが、我々の方からもっとO.B.にはっぱをかける。

☆広い視野、
・文化祭などでもっと山岳部を知ってもらったらいい。
・山は危い－という先入観が皆にある。もっと親に理解してもらう。

☆岳連
・皆、岳連を知らない。
・日本山岳会に入っているが、現状では、会費をおさめているだけで何のつながりも利益もない。入っている必要はないのではないか。
・入会当時の議事録でもプリントして、配り、みんなに知ってもらう。

1、S.A.C.の機構、

☆規約、
・現在の規約はおかしい。改正する必要がある。
・最高決議機関としての総会が必要である。
・会長が学長だから、学長の意志一つで決り、学生の意志が反影されていない。
・現在の規約の主旨は、遭難対策だけだが、よりよい山行をしようとするためのもっと違ったものがでてくるべきだ。

☆新人の問題
・部のカラーが違う、ある程度やった者が全く知らない所に入っていくのに抵抗がある、しばらく友達もいない……等で現在、長野になじめず、ぬけていく者がいるが、
・互にもっと知り合っていれば、もっとスムースにいく。そのためにも今回の

ような会合は有意義だ。
・委員会でも松本から長野にいく部員のキャリア等についてよく連絡して話し合えばよい。

☆S.A.C.の強化。

○何故強化するか、その目的。
・登山には縦走をしたい、岩登り、沢詰めなど色々タイプがある。いつも山のいき方のちがう人と多人数で一緒に行く合宿だけをくり返すことは意義がないので個人山行をどんどんやったらいい。そのためにも沢山の人のいる山岳部の方が有利である。
・この会合を2〜3回して気の合った人と個人山行をしたい。
・統合すれば巾の広い、大きな山行ができる。

○これに対し、
・「山行の統合は現在の段階では無理」でもあり、「大きな山行合宿のための統合は意味がない」が多く出た。
・実際の活動での統合は1つの山行のためにも大きな犠牲が強いられる。まず事務的な面での統合が必要。
・山岳部には排他的な気分が強く、山で他の大学山岳部と会ってもなじめないことが多いが、もし学部間でそういうことがあれば良くない。現在山でのすれ違いも多いが形式的な挨拶をしたりする。もっと気楽になじめるようになりたい。

○統合の方法。
・統合は、組織、条文などの形式によってできるものではなく、このような会合を時々持つことによって、先ず「互に知る」ことから始めよう。よく知り合えば、統合しようという気運が高まる。そうなってから統合する必要があり、始から条文をつくって統合するのは、余り意味がない。

☆今後のS.A.C.
・地理的支障がかなりあって、統合の場合も一番問題だ。
・事務的労力が非常に大きく、山行にも支障をきたすことがある。統合しようとする時も、このことを十分考えてからすることが必要だ。
・情報の交換をしたり研究活動を深めたり、会報をつくっていくことは賛成。

II班の記録

1. 遭難対策について

○ 遭対基金について

・目標額 10万円。(意見一致)。基金委員会を作ってはどうか。

・公けにすると、学校側からの援助がなくなるかと知れないから、個々で内密に、貯金、報告しあいいざという時、どこへと使えるようにしたらという意見とあった。

・方法は、部員、O.B.のカンパ等で積み立てて行く。

○ 保険金について

・手続きはやはり本部でやらねば今回のように遺体の出ない場合、すぐ手に入らない(早くて一年)。引取の手続きだけは、本部に委せては。

・今回のようできるだけ長野山岳部に渡すように努力しよう。

・そのために学長にかけ合ってみれば、どうか。

○ 対策

・海外登山での遭難を考えると、統合した方がやりよい。

・S.A.C.で色んなサークルを作って、話し合って行く。

・ちょっとした事故でも、記録を正確にしてゆこう。

・山行の計画書交換を徹底しよう。

○ 出動については「至見 ~~[illegible]~~ のように学長、学部長両方の要請では行けない場合と出てくる。学長がSAC会長だから、その要請だけで出動できるようにすべきだ」の意見が多かった。

1. 大学山岳部のあり方

☆ 山岳部の目的、及び意義

・「山の好きな者の集りである」が強かった。しかし、「一旦から入らねば統制がとれない」との意見とあった。

○ 登山の社会的意義について

・登山とは「和」の精神である。

・社会に出てから得るものがあれば、今登山する意義がある。

・それに対し、「自己の追求だから間接的な関係しかない。」とか、「山岳部と社会の関連を考えない」などの意見とあった。

・「山に登る人だからこそ、良き社会人である」という言葉とある。

☆ O.B.との関係

・現役の情報を知らせたり山行に誘ったり、会報を出したり、現役の働きかけが必要だ。部室を作り、O.B.とも親ボクを深める。

・J.A.C.が統合した場合、O.B.の統合と寄するより生むが安くて案外スムースに行くようだ。その方がO.B.としても嬉しいのではないか。

☆ 岳連の問題、

・県岳連にオブザーバーを送ってみてはどうか。

・J.A.C.に入っても意味もない。こういう問題はわからない。

☆ 広い視野、

・真の活動状況を文化祭などで知ってもらう必要がある。

1. S.A.C.の機構、

☆ どうして出来たか

・はっきりとはわからないが、大学側が対外的な見栄や、地元という特徴を活かした部として、又、遭対のために、又、文部省政策の一カンとして、作ったらしい。

☆ 何をしてきたか、

・装備の配分、及び計画、記録の発表。

・有名無実の感がある。

☆ どのようにして行くべきか、

・すぐというわけに行かなくとも統合をめざすべきだ。(大勢の意見)。

○ 統合の意義、

1. 組織としてみると、

・バラバラよりまとまった方が魅力がある。

・各部のカラーを活かし合える。

・資料の交換もスムーズになり、遭対にも有利となる。

・海外登山も夢ではなくなる。

・山岳部が一つだと思うと縦走のとき出合っても親しみを覚え、嬉しい。

・共同装備も拡充され、大きな研究会も持てる。

2. 個人的にみても、

・個人的にもレベルアップができる。

・他学部の色々な人達と附合い、山行ができる。すると他人のカラーも吸収でき、学部の特徴も活かして、教養がつく。

・現在の松本のサマーテントをB.C.に上高地で色々な事が出来る。

・O.B.になって他所へ行っても、仲間が多い。
・新人の訓練のためにも良い。
・3つに分れていると、各自関係のある人しか知られず、人為的に心の範囲がせまくなる。多くの人との接解を希望する。
○ 以上があがったが、現規程の2条に適っている。
○ 統合への方法。
・長野と上田が統合し、分校と工学部の松本修学生は、1〜2年、伊那松本へ入り、統一の方向へ持って行く。
・但人山行を一緒に数多くやるのを手始めとする。
・新人合宿を一緒にしては。
・今回のような合同山行、ゼミナールを年間計画に入れてやる。
・下での交流をふやす。部会やコンパに行ったり、対抗野球やサッカーをする等…。
○ 現在の地域的障害はスクを出せば打破できる。
・技術面での結びつきも可能である。
☆ 本部か学部か、どちらに属するか。
・この問題は、遭難の起った時大きくクローズアップされる。
・学長に主権を渡すか、学部長にするかが第一ではないか。
・各学部の問題を、学校側の都合だけで片づけられては困る。S.A.C.として解決すべきだ。
・学校側が各学部の厚生補導係に委任してしまっているとすれば、我々が色々考えても無駄である。従って、以上の機構の問題に関しての意見を学長や学部長に働きかけ、意向をきいてみてはどうか。又、そうしなければ、S.A.C.の発展もないのではないか。

Ⅲ 班の記録

① 遭難対策について。

○ 今回の長野山岳部の遭難が残した問題点。
・起る前の問題
・トレーニング方法、アルピニズムの見解、新人養成の方法、機構、
・大学山岳部のあり方(S.A.C.の分散状態)
・遭難後の問題
・連絡方法とその系統、お金(基金と保険金)、学生会、学部内の問題

○ 保険金
保険に入った当時は遭難に使うために入ったのに、現在はその主旨が不明確である。対策として、次の様なのが挙った。
1. 受取人を部の名義にする。
1. 親の名とするか、前もって部のものであると家に伝えておく。
1. 保険金を部費から出すようにしたらよかろう。
又、目的や使用方法をはっきりさせる必要がある。
○ 基金
・基金を積立てておくことには賛成。
方法として次のように挙った。
1. 保険金をまわす。 2. O.B.会から、 3. 学校側や学生会から援助してもらう。 4. 新入生からとる 5. 部員から(アルバイトで)
○ 責任
・遭難の際の責任(本人or部)をはっきりさせる。

②、大学山岳部のあり方

☆ アルピニズムと大学山岳部について、
○ 学年の途中で入部を認める(長野)か、認めない(伊那松本)か。
・エリート意識があって、入りにくいのではないか。
・山へ行きたい者ならどんな者でも受け入れよう。
○ 大学山岳部の目的
・入部の動機は、1. 技術訓練所的に利用 1. 汗をかろう、1. 植物の名を知りたい、1. 単に山が好きだから …… 等さまざまだが、どこに統一を持って行くか。
・無理に統一させると分列の心配がある。
○ 毎年メンバーがかわり、単位が4年間の山岳部で何を学ぶべきか。
・山の良さ、山へ登る態度。
・社会人として山へ登るとき、大学時代の技術を発揮せよ。
・どんなことでも得れば良いではないか。
○ 社会人の山岳部より長続きしないのは何故か。
☆ リーダーシップ、メンバーシップについて、
○ トレーニングをどのようにしているか。
・松本 ── 強制し、出席率のわるい者は、合宿に不参加させる。
・上田 ── 時間的に規制してやれない。

・本人の自覚に待つのが理想像であろう。

☆ 広い視野

・現代人は、楽しみの場所を、他に求めているのではないか。
・山岳部員の中にもエリート意識があるのではないか。
・無理に説き伏せて入部させる必要は全然ない。
・ワンゲル部員は多い。親は、ワンゲル入部なら許す。認識不足である。
・親、学校、マスコミにも、誤った認識を訂正させる義務がある。
・文化祭etc.でPR.し、部の正しい内容を知らせる。

③ S.A.C.の機構

☆ S.A.C.の規約の問題

・出来た時とは、状態が違うから、現状に合せて、訂正せねばいけない。

☆ 本部か学部、どちらに属するか

・現段階では、現状でやむを得ない。こういう会合や記録の交換をやって、理想に近づこう。
・本部又は学部の係の意見を聞いてみる。
・理想としては本部に属し、顧問に学長が当り、各学部から、任命された者で組織され、S.A.C.に事務を委せてもらう。
行動は別としても、部報は人数分だけ発行し、統合へ持ってゆこう。
・今のS.A.C.をもっと強力な連合体にし、年に1・2度、全信大の山行をし、統合のきずなを作る。

☆ 新人の問題

・途中から入ることは不安であり、籍をおいた所が懐しい。(松本から長野に移る人)
・新人として、入った部に最後まで残ったらどうか。
・交流を多くし、移ってくる人達を入りやすくしよう。
・交歓会をやっても各部の山への固定観念は変らないから、意味がない。
・教育学校生も2年間松本でやったらどうか。
・新人は全員行動を共にし、その後別れて、各部に行くのはどうか。
最後の意見が最有力であった(但、上田は無理)。

☆ S.A.C.の強化

・山は個人が単位であり、人数が多くなっても無意味だ。今のま

までよい。
・地理的に無理であろう。
・社会人のパーティーは、日常生活は、別々で山行のみ一しょだから、大学においても出来ないことはない。
・上田は部員が少ないため統合に賛成。
・今回のゼミが行なわれたのも、一歩統合へ近づいている。
・新人をS.A.C.として一括してやれば前の問題もかたづき統合へ一歩近づく。
・本部の意向がはっきりしていない。真意をきく必要がある。
・厚生補導面で話し合ってもらうようなど、学校側へ働きかける。
・とにかく、強化・統合へ進もう。

山岳ゼミナール会計報告

○収入の部　1,210.×36人＝43,560.－　実収入 3,6000.－
内訳 食費 200×2日＝400.　松本鈴蘭往復 410.　予備費 190.－
○松本までの交通費 各自負担額 210.
上田 440×4＋320＝2,080.（1人様、井より）
長野 360×13＋100＝4,680.（1人明科より）
伊那 280×4 ＝1,120.
7,880.　210×36＝7,560.　→不足分 320円は予備費より

○支出の部

食費 米代 40kg	3,760.－	計画作成発送費	1,455.
福食 パン その代	9,680.－	名札	105.－
くず菓子	700.－	島々－鈴蘭バス台	140.－
小計	14,140.－	合計	1,700.－

交通費	松本－鈴蘭往復 410×36	14,760.－
	荷物台	700.－
	松本までの交通費不足分	320.－
	準備委員会交通費	3,330.－
	小計	19,110.－

支出総計 34,950.－

○残金の部　1,050.－（内上田へ230.－貸）

反省（会計係）　　（宮崎）

○松本までの交通費の頭割負担について伊那松本の部員から少なからず苦情が出ました。今後考えておく必要があると思います。

○本部との交渉が物分れとなり荷物も運んでもらえず、燃料代、水道代の請求があるかと心配しましたが無料で済みました。本部と岡崎さんにお礼申し上げます。

○岡崎さんには帰り際不在につき、お礼も言わないで帰りましたが、皆で何か考えて下さい。

○帰りのバスの連絡を忘れて皆に迷惑をかけました。ここに改めてお詫びします。

○残金は報告書作成に一部を使用する予定です。

感想

○感想　　文理学部　小川 勝

兼鞍でのS.A.C.の会を終えて、参加した人はやはり集まって良かったと感じたのではないだろうか。我々の第一の目的であった"お互に知り合う"ということは、その第一歩が達成されたのではないか。
運営の上で色々とまずい所もあったけど、全体として成功したと、僕は考えている。伊那松本部員のいわゆる"雑さ"が全体のムードを支配した感もあり、それに反撥を感じた人もいたであろう。三つの山岳部が意外に似ている所があり、また違った面があることを識ったのは、これからのS.A.C.を考えた時、非常に大きなプラスになると思う。
今年は急にこの話が持ち上ったのだが、来年度からは年間計画に組み入れれば、無理をしなくてこういう会が持てると思う。
討論では色々の問題点が出され、それに対する解決の方向も色々と出た。性急に事を運ばないで長い目で

S.A.C.の将来というものを考えるべきであろう。

○山岳部活動の一考　　農学部　宮崎敏孝

"乗鞍での合宿が、果して登山活動と言えるであろうか？"
乗鞍岳登攀、それだけが目的ではなかった。我々は登行を通して相互に理解し合うことを求めていたのである。(それだけがすべてではないが)。その目的を達するには他の方法でも可能であろう。しかし、我々の経験から、共に登り、食い、話すことが最上の方法であったからである。
お互いを知り合い、話し合うことを第1目標として合宿することは、登山活動という一語では、表わしきれないと思う。
"何故、皆が顔を合わせ、話し合う必要を感じたか？"
それは討論した3つの問題があったからだけではないだろう。合宿を通して、より多くの人々と語り合い、各自の人間性をブツケ合うことが、勉学と同様、我々の年代に特に必要であると思い、その欲求を感じていたからであろう。
ただ一回の、それも数時間の討論で結論は出せない。
しかし、○遭難対策基金の作り方、
○保険金の目的と使用法、
○山岳部活動の社会的意義と社会への働きかけ、
○S.A.C.の性格を明確にすること、
○S.A.C.統合の方法、
○伊那・松本山岳部、長野山岳部の性格の不明瞭さの解決法、
等々、より具体的な問題が提出されたことは事実である。だが、その根本とも言える統合の意義と是否について、意識的でないにしても、それを論点より外したことは、考えが浅かったと思う。この点と先にあげた問題を早急に解決することが我々に課せられた。合宿を推進した3年生部員が、これらに解答を与えるように動くことが今後の課題であろう。

最初に書いたように今度の合宿は登山行為そのものでは、

ない。だが登山が本来"文化"であり、その内に生活を含み、より生命を意識し、その行為が山岳部として集団でなされるならば、その行為に関係する種々な（一面よりみれば登山とは裏腹な）文化部的な活動にも真剣に取組み、それらの問題を解決しなければ、完全な部の活動には、ならないであろう。この点こそ、統合を推進する時、特に熟慮する必要がある。
僕が準備委員として、上田での会合の帰途、「これが登山への情熱だろうか？ 3時間ばかり話し合うために、往復9時間以上も列車に乗ることが、はたして登山への情熱と言えるだろうか」と思った。日本山岳会信濃支部長の「二つの大学でありながら一つの部として活動できないのは、自分達の活動に対して情熱がないからだ」、また森田氏の「距離的・時間的なものは、情熱で解消できるものだ」などの意見は、他人のそらごとだと感じた。

僕は、上のように思い、感じたけれど、統合に反対なのではない。統合は全部員の情熱を結集しなければ不可能であり、「教養課程の統合によって統合されるだろう」との意見がある間は、一部の部員の先走りに終るであろう。伊那・松本山岳部の現在の部活動においては、統合は、痛切に感じる問題ではない。だが、今度の合宿で我々一個の部では、得ることができなかった様々なものを各自がつかんだことだろう。それを自分だけのものにするだけでなく、皆のものにしたいと思う。
僕は、そこに統合の意義と必要を認めたい。

「案ずるより、生むが易し」の言葉通り、最初、計画を立てた時に感じられた種々の不安が、実際に表面化せず、大多数の人が、充ち足りた表情で「よかったなあ！」と言ったことを準備委員の一人として、一番嬉しく思っている。そして今、感ずることは、「もっと、もっと皆で話し合ってみたいなあ！」ということである。

反省とその後

2月6日本部でS.A.C.委員会が開かれ、糸鞍ゼミの反省及び第二回ゼミの原案作成がなされた。

糸鞍ゼミナールの反省まとめ

結論は出なかったが、"親睦"という目的は達成せられた。
また短時間でもS.A.C.の統合について話し合ったことは意義があった。
来年度は年間計画に組み入れ、単なる親睦に終らせず、発展させたい。回数も2回ぐらい実施したい。

第二回ゼミナールについて

日時：1965年5月30日～6月1日
場所：未定
目的：山行をしながら遭難対策（1.組織・機構面、2.実際面・指導面）について討論する。
実行委員：**L.望月 映洲**（長野）、小川 勝（伊那・松本）、
岡村 紀雄（上田）
学校側4名

記録係として、

- 不慣れのためと個人的な理由から、完成が非常に遅れて誠に申し訳ありません。
- ふつうの合宿記録と性質を異にしているにもかかわらず、ただ"まとめよう"と焦り、結果は非常にまとまりのない、読みづらいものとなってしまいました。無能をお詫びします。
- 参加者の間で好評でありました事を、嬉しく思っております。
- 帰りの車中での「のりくら」織り込みドドイツを載せようと思っていましたが、座を失くしましたので残念ながら割愛させて頂きます。